

# 京都らしさを贈れるカタログギフト『京もの愛用券』

## News Letter Vol.2

引き出物、お祝い、お返しに…贈る相手の方に品物を選んでいただけるカタログギフト。昨今では従来の商品を総合的に取り揃えたカタログギフトに加え、北欧雑貨、旅行や食事などの“体験”をプレゼントするものなど、個性豊かなカタログが登場してきました。

京都府でも、京都の伝統工芸品をはじめとする「京もの」に特化したカタログギフト「京もの愛用券」を販売しています。「京もの」と言えば、特別なものと思いがちですが、「もっと気軽に日々の暮らしの中で京ものを楽しみたい」という思いから、京都府が協力し、京都試作センター株式会社が販売をしています。京都府は、この事業を通じ、京都の若手職人たちの新しいものづくりの展開を推し進めるとともに、サポートも行っています。

このニュースレターでは、「京もの愛用券」の特徴を改めてご紹介するとともに、カタログギフトでは伝わりきれない職人の方の思いやこだわりをお伝えするため、「京もの愛用券」に参画している職人の方をピックアップしてご紹介してまいります。

京都で生まれ育まれた、数々の伝統的な技術を駆使した逸品であると同時に、現代の生活様式にもなじむ「京もの」を集めた『京もの愛用券』と、「京もの」を日々生み出す京の職人たちにぜひご注目くださいますよう、お願い申し上げます。



### <INDEX>

#### P1 京もの愛用券の特徴

#### P2-3 京焼を代表する革新的な工房「陶あん」のご紹介

##### ◆京もの愛用券の特徴◆

##### ①京都ならではのプレミアム感が詰まった贈り物

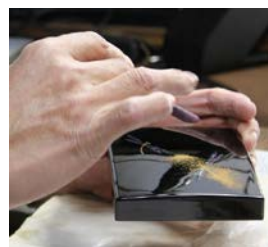
伝統、文化などどこをとっても格別な魅力を放つ京都のまちで作り上げた京ものは、まさに京都ならではのもの。

##### ②「京もの」は品格・品質に優れた逸品

西陣織、京友禅、京焼・清水焼に代表されるように、伝統と文化のものづくりが脈々と受け継がれている京都で、手間、ひま、心をこめて作る商品は決して他には追従できない品格と品質を誇る。

##### ③デザイナーが「本当にいいもの」を選定

伝統素材の商品企画から住空間のデザイン・プロデュースまでを手掛けるデザイナーが「暮らしの中で普段使いできる京もの」をコンセプトにセレクト。



##### ◆販売価格及び商品点数◆

- |                        |     |
|------------------------|-----|
| ① スタンダードコース(3,675円税込)  | 44点 |
| ② ロイヤルコース (5,775円税込)   | 33点 |
| ③ プレミアムコース (11,025円税込) | 23点 |
| ④ エクセレントコース(32,025円税込) | 22点 |

##### ◆購入方法◆

京もの愛用券公式HP <http://www.kyoto-gift.jp/>  
の注文フォームよりお申込み

## 第一弾【陶あん 四代目当主 土淵善亜貴(どぶちよしあき)氏】

今回は、東山泉涌寺に窯を構える、京焼・清水焼窯元「陶あん」の若き当主、土淵善亜貴氏にお話を伺いました。『京もの愛用券』に掲載している「染付ビアカップ(ロイヤルコース：5,775 円)」と「花結晶四寸皿 5 枚組(プレミアムコース：11,025 円)」の秘密と工房の魅力に迫ります。

### 「陶器なのに軽い。」

#### 「そんなビアカップを作りたかった。」

善亜貴氏がそう語るように、その洗練されたデザインもさることながら、このビアカップの特徴は薄さと軽さにある。陶器と言えば、ずっしりと重いのが当たり前。けれど、このビアカップは陶器とは思えないほど軽く、グラスを手を持ち光にかざせば、指の影が透けて見える。「技術については企業秘密だが、飲み口が薄いビアカップは一番美味しくビールが飲めるから、どうしても軽いビアカップを作りたかった」と話す。また、軽いだけでなく、絶妙にへこみがあり、質感もマットで手に心地よくフィットされるように作られている。

なお、このビアカップの「薄さ」には陶あん独自の「うす板」の技術が応用されている。「うす板」とは厚さ 1.5mm の陶器の板で、その軽さから壁掛けにもでき、陶板に絵を付けインテリアとして楽しむお客様もいるそう。「陶あんにとっては何でもない技術」と語るが、薄くて軽い、さらには絵付けまでした「うす板」を扱う工房は日本国内でも珍しい。この技術を応用し、陶器とは思えないほどふわりと柔らかなフォルムのランプシェイド(左下参照)も、知る人ぞ知る名品だ。



↑「染付ビアカップ」  
ロイヤルコース(5,775 円税込)

### 京焼は“特徴のなさ”が特徴？

そもそも京焼とは？とお聞きすると、「“これ”という特徴がないのが京焼」という答えが返ってきた。京都の焼き物の歴史は平安時代にさかのぼる。都として栄えた京都では、流通網の発達とともに、中国、朝鮮、国内から焼き物が集まってきていた。そのため、京都でわざわざ焼き物を作る必要がなく、長く京都では焼き物の生産はされていなかった。ところが、安土桃山時代に入ると、お茶の文化が繁栄し、それとともに茶器にも注目が集まり、茶人・千利休のように、自分好みの焼き物を作りたいという重要が増えた。当初は各地に発注を出していたが、時間とコストがかかるため、京都に全国の職人を集め、欲しいものを作らせるようになったことが京焼のはじまりと言われている。その結果、京焼は中国や朝鮮、日本各地の技術や技法を駆使し、洗練されていったことで、様々な種類の焼き物を焼くようになったとされている。そのため、窯ごとにも異なった特色を持っていることが特徴と言える。



↑「ランプシェイド」  
(94,500 円税込)

### 陶あんの革新は「うす板」だけではない

前述したように、京焼は窯ごとに特色があるようだが、陶あんでも「うす板」の技術の他に、他の窯が追随できない技術や独自の色絵付けを常に工夫している。

例えば、鉛は低温で溶ける利便性から釉薬に広く使われてきたが、近年は安全性の問題から各窯で独自の対策をしている。陶あんでは「伝統工芸品といえども、安全でなければ意味がない」と全ての釉薬で無鉛化を実現。特に無鉛化により生じる筆なじみの悪さや焼付の温度などの問題もクリアし、陶器では珍しい紫やパステルカラーなどの新色も続々と生まれている。現在、彩色に使える色は 300 色以上。鉛フリーは器の内側(右上参照)にも色絵付けが可能となり、作品の幅が広がったという。

また、釉薬の技術では「花結晶」(右下参照)もユニークだ。「花結晶」は「亜鉛結晶」とも言われ、亜鉛を釉薬に入れて焼くことで「花びらをちりばめたような」繊細できらびやかな模様を作りだしている。この技法は、ヨーロッパからもたらされたが、焼き方が難しく量産ができないため日本では流通していなかった。2～3 年前に商社の人に相談をもちかけられ、「試してみようか」と始めたのがきっかけなのだそう。窯の温度や焼き方、釉薬の調合の仕方など何度も改良を重ね、見事量産化に成功。さらに、10 色ものバリエーションがあり、色によって美しさや味わいが異なる、人気シリーズだ。



↑器の内側に色絵付けが施された茶碗



↑「花結晶四寸皿 5 枚組」  
プレミアムコース(11,025 円税込)





↑手作業で色上絵付けをする職人

## 「お客さんの喜びが一番大切。」

陶あんのこだわりは、その技術の高さやデザイン性だけではない。善重貴氏は、「鉛フリーや花結晶といった高度な技術を開発しても、工芸品は1点ものではないから、使ってもらわなければ意味がない。高価過ぎればお客さんには受け入れられない。常に安全、品質、商品の魅力や値ごろ感など、トータルのバランスを意識している。」と話す。

また、陶あんには先代の頃にこんな話がある。玉湯呑(左記写真)という大ヒット商品があるが、完成させた当時、問屋さんに「こんな足のない湯呑みが売れるはずがない」と突き返されてしまった。仕方なく、工房だけで売り始めたところ、「こんな湯呑みを探していた」と瞬間に、お客さんの間で評判となり、陶あんの大ヒット商品となった。問屋さんという商品を売るプロの目からみて「売れない」と思われた商品が「実際は売れた」、という経験を通じ、固定観念を持たずに、常に挑戦し続けることが大事だということが、陶あんの商品開発の姿勢となった。何が良いかは、お客様が決めること。作り手や売り手が持つプロ意識だけで物事を決めてはならない。その想いは4代目善重貴氏にも受け継がれ、今もなお日々挑戦し続けている。



↑「玉湯呑」各 6,300 円(税込)

## 「伝統を守るということは、 その時代にしか作れないものを生み出すこと。」

常に新しい技術を…と挑戦し続ける陶あんだが、善重貴氏が次世代に伝えていきたい想いを最後に伺ってみた。「京焼だけではなく伝統工芸と言われるものは歴史があるもの。先代が作り上げてきたものを守ることも大切だが、同じものを作るのではなく、いかに造詣的な感覚を研ぎ澄まし、新しい素材、デザイン、技術を駆使し、その時代にしか作れないものを作れるか。古典的なものを作り続けつつ、今のライフスタイルに合うものも作るということが、今作っている者の役目だと思う。」と話す。だが、その「生み出す」という作業が一番難しいという。アイデアを10個出して、1個新しいものができるというような世界なので、アイデアを出し続け、同時並行でいくつもの新しいことにチャレンジしているのだそうだ。そんな苦勞を淡々と話す善重貴氏の横顔は、どこか楽しげで、伝統を守りぬこうとする若き職人の覚悟が伺えるようだった。



↑工房でロクロを回す職人。



## ＜陶あんについて＞

大正11年、京都東山泉涌寺で創業。以来上質な原材料を使い、熟練した職人の手で作品を作り上げることで評判の京焼の窯元。野々村仁清や尾形乾山からの京焼・清水焼の伝統を受け継ぎつつ、時代とともに変化するニーズに答えるため技術革新を行っている。本店ほか3か所に店舗を構える。また本店の工房では、職人たちが繊細で美しい商品を作り続けている。なお、本店では陶芸体験や工房見学なども受付中。

《問い合わせ先：075-541-1987》



### 《本件に関するお問い合わせ》

京都試作センター(株)京もの愛用券事務局  
京都府広報代行 <(株)オズマピーアール内>

担当：吉原・藤田 TEL:075-316-2100 FAX:075-316-2122  
担当：阿部・荻布 TEL:03-4531-0225 FAX:03-3265-5058